

音楽と食に見る今日の文化

トークショー「岡田暁生×藤原辰史」

5月12日、梅田葛屋書店で、京大人文科学研究所の岡田暁生教授と藤原辰史准教授によるトークイベントが開催された。今回のイベントは、岡田教授が執筆した書籍『音楽と出会う』の刊行を記念したものである。親交の深い両氏が、それぞれの専門である音楽と農業史に触れながら、今日の文化や教養のあり方について対談した。

まず岡田教授は、音楽の変化を指摘した。かつては、「自分を狂わせてくれる音楽」があったという。しかし、冷戦期を境に、技術や売り上げで歴史を塗り替えることはあっても、「常識を失わせる名曲」を作り出すカリスマが現れることはなくなっている。岡田教授は説明する。そして、今日の音楽の特徴として、癒しを与える音楽が増えていると指摘し、「音」の位置を施して「正常」にするという科学主義的な発想があると批判した。

今日の文化の問題点に関して藤原准教授は、自身の専門である農業史に触れ、食べ物味の画一化を指摘した。食事はその場その場の匂いや会話の雰囲気とあわせて楽しむべきものだが、第一次大戦以降、真空パックや空調設備などによって空気をコントロールする「コンビニ」なども同じ味が提供されるようになったと説明した。この「真空パック化」につ

いて、岡田教授は音楽でも当てはまるとして危惧した。1970年代以降、演奏の録音方法が変わり、楽器ごとに録音して合成するケースが増えたという。しかし、本来、演奏は、雑音や湿度といった要素を含めた空気に敏感であると岡田教授は指摘した。「自分が当たり前だと思っていた空気がどこでも

同じではないと感じさせるのが音楽なのに、『真空パック』にするのは問題だ」と述べた。画一化の動きに関連して、『音楽と出会う』の中で岡田教授は、人工知能(AI)に言及している。アルゴリズムに落とし込めるものがAIに取って代わられると、数を扱う人がいらなくなると指摘

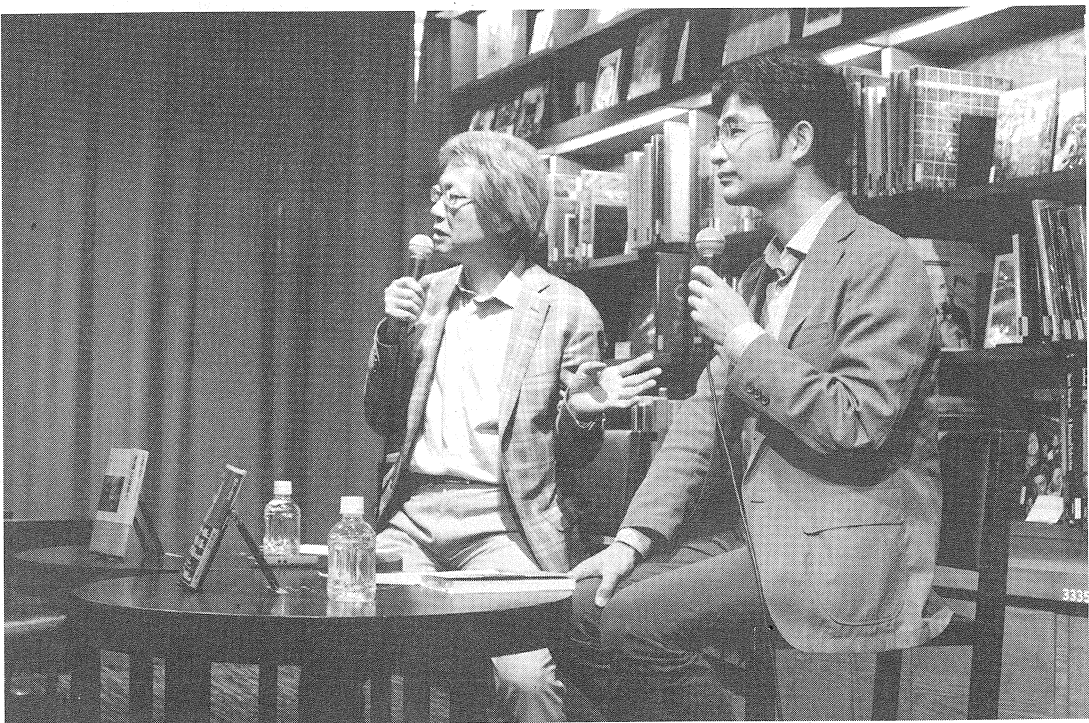
した。また、AIに取って代われないように教養を身につけるといふ考え方の妥当性について、

「エスでもノーでもある」と述べた。「教養としての〇〇」という本を読んで身につけようというものではなく、五感を十分に活用して自分の足で確かめに行く姿勢が必要だとした。

変化の時代を生きる若者に対し、岡田教授は、「この世界のポッシビリティを狭く考えずに、違和感のあるところに踏み込むとよい」と述べた。最後に、ネットが使えないところの生活を体験す

るといった方法を提案し、既存システムの外を見ることが大切と締めくくった。

梅田葛屋書店では、「読書の校」と題し、約10の出版社が主催する選書フェアを実施している。期間ごとにテーマが設定され、今回のトークショーは、第6講「読書の愉しみ」が開催となつている。



親交の深い岡田教授(左)と藤原准教授(右)が対談した